

V. J. ベニット

ヘルマン・ヘッセの作品における女性の役割 (III)

内 尾 一 美
渡 辺 信 生 訳

シッダールタ

これまで論じてきた最後の作品において、主人公クラインによって示されたかなり官能的なムードとは異なり、『シッダールタ』の基調は、著者がこの作品を書いたときの「ロゴス」の原理への全面的な傾斜を示している。この作品は重要なことに、物質的などというよりはむしろ知的な方向性を持っている。ヘルマン・ヘッセは、特に『デーミアン』創作以後の時期には、父の原理、即ち、「ロゴス」の方により大きな献身を示した。『シッダールタ』や『ガラス玉遊戯』の一部分のような徴候は、母の領域に対する父の領域の一時的な優位を強調するのに役立った。しかし常に、『クラインとワーグナー』や『荒野の狼』や『ガラス玉遊戯』のように、著者の人生における極めて明白な両極性の間の動揺を立証し、更にまた女性の原理の途方もない噴出力を確認する、「エロス」志向の創作も点在していた。問題になっている作品のムードや基調がどうであろうと、ヘッセの創作の目的は、彼が『デーミアン』において達成した程度の自己認識を、再び是認しようと試みることであった。続いて『シッダールタ』も、上述のように主として精神志向ではあるけれども、明らかにこの同じパターンに入るものである。

バラモン教の教えが、彼の望んでいた救済を与えてはくれなかったことに失望して、シッダールタはどこか他の所で目的を追求しようと決心する。彼は家族の絆を断ち、友人ゴーヴィングと共に故郷を去る。恐らく、3年を共に過す禁欲的な沙門たちの中で、彼は自分が探し求めているものを見出すことができるだろうと彼は思う。だがこの人たちの禁欲主義とヨーガもまた同様に、自分自身をよりよく理解させてはくれないという結論に彼は到達する。そこで彼は、

偉大な仏陀ゴータマから英知を得ようと、ゴーヴィンダと共に出かける決心をする。ゴーヴィンダはゴータマに満足する。しかしシッダールタは、彼以前のシンクレア、クライン、その他の人たちがそうであったように、答は各個人の内部にあることを確信している。ただ一人精神的な生活を送ってから、シッダールタは自らの内なる官能的なものに自由な表現を許そうと決心して、ゴーヴィンダ、仏陀、それにこうした実りのない生き方に別れを告げる。恐らくこれが自分が探し求めてきた答なのだと考えて。

渡し船で、ある河を渡って彼は都へやってくる。そこで彼は偶然（共時性）美しい有名な娼婦カマラに出会う。彼は直ちに彼女に魅惑されて、彼女から愛の技術を学びたいと願う。この貧乏な他国の男に心惹かれて、カマラはシッダールタが莫大な富を獲得するのを助ける。今や彼はカマラによって与えられる快樂も含めて、金で買うことのできる如何なる快樂も手に入れる余裕がある。数年の上流生活と放蕩のあとで、彼はこのアプローチも禁欲主義同様、彼を彼の目的に近づけてはくれなかったのを悟る。過去において彼を導いていたあの内面の声は、こうした気ままな贅沢な生活によって次第に消されてしまっていた。カマラが彼の子供を身ごもっているのを知らずに、シッダールタは財産と富を全部残して密かに町を出る。そして河の辺りに戻って本気で自殺を企てる。しかしながら、まさに入水しようとしたとき、彼の昔の自我が突然よみ返って、溺死するのは答ではないことに気づく。

もう一度本来の無垢の状態に立ち帰って……禁欲主義の才月と放蕩の才月とが互いに相殺し合ったのである……彼は河の辺りに留まり、自己を理解することを学んでみよう決心する。彼は善と悪の認識を積んだ点で、若い頃より有利なのである。賢者の渡し守、ヴァズデーヴァと同じ部屋に住んで、シッダールタは河の多くの秘密を教えられる。彼は時間は実際には存在しないこと、すべての存在は一体であることを学ぶ。しかしこの知識を幾らかでも用いることができる以前に、彼は先ず愛によって完全に満たされた状況を達成しなければならない。

12年が過ぎ去った。そして遂にある日、カマラとその息子が仏陀を捜して河へやってくる。彼女は蛇に咬まれて死ぬ。そこで早速シッダールタはその子を育て面倒を見る義務を引き受ける。都会に毒され、自分の生命の残りを2人のもうろくした老人と共に過すまいと決心していた少年は、都会の生活へ帰って行く。最初シッダールタは悲嘆にくれる。しかし彼に先立って彼の父親も同様の結論を下したに違いないのであるが、人生において自分自身の道を進んで行

くことが、各個人の義務であるということに次第にはっきりと理解する。シッダールタは今や河と一体になる。彼の魂と河の魂とがひとつになる。「シッダールタは自らの魂のパラダイスの中に、統一の中に生きる。」¹²⁷ シッダールタがこの無私の状態に達してから、ヴァズデーヴァは死ぬ。なぜなら彼の友人が、今や彼が保持してきた伝統を引き継ぐことができるようになったからである。その後まもなくゴーヴィンダが偶然通りかかる。そして幾らか神秘的な啓示によって、この老人が本当に自分の古い友人であること、そして独特な方法でこの老シッダールタが、あの捕え難い内面の平和と調和を達成したことを認めるのである。

『デーミアン』においては、シンクレアは「明るい」世界と「暗い」世界の引力の間で、絶えず揺れ動いていたのであるが、『シッダールタ』においては、精神と自然という古いおなじみの両極が個別的に取り扱われている。シッダールタの生活の最初の20年間は、彼の精神的な発展に充てられている。第2の20年間は、殆んどもっぱら彼の官能的な性質の体験に関係している。河へ戻ってきてからの第3の20年間は、渡し守ヴァズデーヴァの英知を学ぶ彼の節度ある生活に関連している。彼は自分の今までの全生活は、今や新しいシッダールタを生み出すのに必要なものであったということに悟る。

「だからこそ彼は世間に出て行かねばならなかったのだ。快樂と権力、女と金に熱中しなければならなかったのだ。商人、ばくち打ち、酒飲み、吝嗇漢にならねばならなかったのだ。彼の内なる司祭と沙門が死んでしまうまで。だからこそ彼はこの醜い年月をずっと耐えてこねばならなかったのだ。嘔吐や虚しさを、荒涼たる墮落した生活の無意味さを耐えねばならなかったのだ。究極まで、苦い絶望に至るまで、道楽者シッダールタ、吝嗇漢シッダールタも死んでしまうまで。彼は死んでしまった。そして新しいシッダールタが眠りの中からめざめたのだ。」¹²⁸

ある種の保留は必要であるが、シッダールタの発展の3つの段階は、恐らくヘッセの体験の3つのかなり幅広い段階に対応するであろう。第1に一人の異性ととの交際もない孤独な年月があった。それからヘッセの結婚と、すぐその後に続く彼の「文学的乱婚」がやってきた。そして最後に和解が達成され、情熱の嵐が静まり、「自然と精神との総合が発展し、あらゆる存在の統一、全体性、同時性」¹²⁹ の条件が達成された円熟した年月がやってきた。

シッダールタの体験の第2の20年間は……カマラや「小児人たち」と過したあの年月……この研究の目的にとって最も興味深いものである。彼が官能的な

人生に導き入れられるのはこの時期のことである。シッダールタが「小児人たち」の仲間になって間もなく、友人ゴーヴィンダに関する夢を見る。その夢の中で彼はゴーヴィンダに抱擁されている、ゴーヴィンダは突然女に変身する、「そしてその女の依服から豊かな乳房がこぼれ出ていた、それに寄り添ってシッダールタは飲んだ、その乳房の乳は甘く強い味がした。それは女と男、太陽と森、動物と花、あらゆる果実、あらゆる快樂の味がした。それは彼を酔わせ意識を失わせた。」¹³⁰ マーク・ボールビーは、ここには「男性から女性へのあの特徴的な移行、ヘッセの小説のあの本質的な構造的な要素、即ち、デーミアン、ヘルミーネ等の両性具有的特質がある」と述べている。¹³¹ とに角性愛的なモチーフが直ちに花開き、シッダールタは娼婦カマラへと導かれる。

「カマラはテレジーナと同類の女である。しかしながら、彼女はテレジーナほどナイーブでも、動物的でもない。カマラの東洋的な世慣れ方は、テレジーナのそれより微妙な種類のものである。けれども綿密に比較してみると、2人とも同じ鋳型から出てきているように思われる。」¹³²

プロとして、カマラは自分は思うがままに愛を分配することができるのでシッダールタに断言する。ちょうど沙門やバラモン教徒が、自分の知識、精神的な宝を、盗まれたり奪われたりすることに対して免疫になっているように、カマラもまた自分の貴重な技術を駆使して、彼女が望むときには誰でもいつでも満足させる。シッダールタはそれからすぐ、愛のゲームの技巧をマスターする進路に沿って、指定された道をたどることに同意する。彼の色道への入門はカマラの快樂の森……極めて象徴的な言及であるが……に入り、続いて官能的な領域、「小児人たち」の世界に飛び込むことである。湖の冷たい水の中に落ちて死んだクラインのように、身を投げる代りに、シッダールタは、「生の中へ投身」して、あらゆる体験を十分に味わい、楽しむ。不幸なことに、小児人たちの生活を信奉する際に、シッダールタは、

「……彼らの苦しい、否定的な側面、金持ちたちの『魂の病氣』、彼らの動物的感情的な生活だけを学びとる。耐え難いことに彼は、彼らの心地よい盲目、麻痺した自信、目的と永遠に同一化した冷静さを持ち得ない。……そこで彼は……最初は一見楽しげな調子ではあるが……『小児人たち』特有のあの感情、クラインの人生を地獄に変えたあの感情、即ち不安を感じるに至る。」¹³³

ちょうどクラインが以前の生活の中から、ある種の価値を保持することを犠牲にして、生活の裏面の新たな追求に完全に没頭したために完全に墮落したように、カマラと小児人たちの行動にシッダールタが忠実に従ったことが、彼を

荒廃させる作用を及ぼす。

「一度回された陶工のろくろが、まだ長い間回り続け、それから次第に力を失って静止するように、シッダールタの魂の中でも、禁欲の車輪、思索の車輪、識別の車輪は、長い間回り続けていて、今でも依然として回ってはいた。しかしそれはゆっくりとためらい勝ちに回っていて、静止しようとしていた。湿気が枯れて行く木の幹にしみ込み、次第に広がって腐らせるように、世俗と怠惰が次第にシッダールタの魂にしみ込み、次第にその魂に広がり、それを重くし、それを疲らせ、それを眠り込ませた。」¹³⁴

自らの苦境と彼の見た特殊な夢に対するシッダールタの反応は、過去の生活から逃れようとするものである。その同じ夜、彼は放蕩と快樂の20年間に獲得したすべてを残して、こっそり家を抜け出す。鳥が鳥かごから逃げたように、カマラの快樂の庭から逃げ出したことは、シッダールタに新たな希望を与える。彼の心は充実している。「私は逃げ出したのだ。私の逃走は成し遂げられたのだ。私は遂に再び自由の身になって、子供のように空の下に立っているのだ」¹³⁵ と考えるときに。両方の世界を体験した後になって初めて、シッダールタはあらゆる存在の統一、全体性のあの状態を味わう心の用意ができています。ゴヴィンダと禁欲主義の世界は体験され、不十分なことが分かり、見捨てられた。カマラの世界、しばしば語られる「暗い」世界もまた試みられたが、同様にうまく行かなかった。クラインの同様の体験は、同様に強力で束縛するエネルギー、即ち、カマラやテレジーナのような原理を同化し受け入れるべきエネルギーで、無意識の力に抗することができないために、彼自身の死という結果に立ち至ったのであるが、シッダールタは生活の第2のレベルを統合し、その結果官能的なものを超越し、究極の体験へと進むことができるのである。

荒 野 の 狼

ちょうど『デーミアン』が、かなり短い期間ヘッセに対して心を落ち着ける効果を及ぼしたのと同じように、『シッダールタ』もまたある程度同じような効果を及ぼした。『シッダールタ』のカタルシス的な特質は、ほんの3年か4年しか続かなかった。それからヘッセは無意識から生ずるあの投影を、ともかくも宥和する問題に再び直面した。

『デーミアン』は、マグナ・マターへの忠誠、究極的なアニマ像の受容をより多く支持したけれども、『シッダールタ』は、母の原理に勝る父の原理の明

白な有効性を、より多く信頼する著者の傾向を表現していた。しかしながら、1927年におけるヘッセの『荒野の狼』の刊行は、1923年の『シッダールタ』において達成された統合が、大して長続きしなかったこと、そしてまた母の原理が十分になだめられていなかったことの証拠であった。『荒野の狼』の創作に関して再び同じパターンが繰り返される。そしてヘッセの主要な作品において少くとも2回再現されることになる。

ハリー・ハラーという人物において、これまでに我々が既に十分精通するようになった人格の二分法が再び描かれている。一方には、知的で、完全に礼儀正しいいたしたブルジョワ、かつて仲間の人々の尊敬と評判を享受した人物、ハリー・ハラーがいる。しかし今やそのすべては変化した。

「一度は私は市民的名声を私の財産と共に失っていた。そしてそれまで私に敬意を表わしてくれた人々から受ける尊敬を、あきらめるのを学ばねばならなかった。二度目は一夜で私の家庭生活が崩壊していた。精神病になった妻が私を気楽な家庭から追い出した。愛と信頼が突然憎悪と阿修羅の戦いになり、同情と軽蔑の目で隣人たちは私を見送った。その頃私の孤立が始まっていた。そしてまた数年がたち、苦しいつらい数年がたって、きびしい孤独と骨の折れる自己訓練のうちに、新しい禁欲的精神的な生活と理想を打ち立て、再び生活の一種の静けさと高さに到達して、抽象的な思考訓練ときびしく規定された冥想に没頭してから、この生活形態もまた崩壊して、その高貴な高い意味を突然失ってしまった。」¹³⁶

他方において、誤解された知識人の悲劇的な苦悩に悩んでいるこの48才のハラーは、自分は実は「荒野からきた狼」¹³⁷だと感じている。彼は自分のことをそのような知識人とは関係もなく共感もしないブルジョワ社会内部の「寂しい狼」と認めている。彼は自分の生存そのものが脅かされていると感じるほど、疎外され追放されてきた。それから彼は期待に胸を張らませて、50回目の誕生日、自殺による自己解放のためにとっておいた日を楽しみにして待っている。卑小なブルジョワ社会から逃れるために、孤独と隠遁のうちに暮そうと決心してはいても、ハリー・ハラーはやはり自分が育った世界との絆から完全に絶縁することができない。

「どうしてそうなのかわからないが、故郷のない荒野の狼であり小市民社会の孤独な憎悪者である私は、いつもちゃんとした市民の家に住んでいる。これは私の古い感傷である。私は宮殿にもプロレタリアの家にも住まずに、よりによっていつもこうしたとても行儀の良い、退屈至極の、すみずみまで行き届いた小

市民の巢に住むのである。そこではテルペンチンと石鹼の匂いが少しして、玄関の戸をばたんと閉めて錠を下ろしたり、汚れた靴で入ってきたりすると驚いたりするのである。私は子供の頃からこの雰囲気が好きである。そして故郷のようなものへの秘かな憧れが、希望もなく私を導き、こうした古い愚かな道が繰り返されるのだ。」138

ある晩彼が不思議な方法で受け取る「論文」によれば、荒野の狼は両極の間で不安定な位置を占めている。一方の極を代表する「市民」は、秩序ある生活を必要とし、両極に向って迷い込んで行くあらゆる傾向に抵抗する。即ち、彼は聖者とも罪人とも同一視されないことを好むのである。もう一方の極には、混沌を彼らの存在の自然な領域として受け入れる「不滅の人々」がいる。なぜなら彼らは、もはやいかなる両極性も存在せず、生のあらゆる面が必要で良いものであると見なされている領域に住んでいるからである。

人生は耐え難くなったと確信して、ハリーは人生に完全に終止符を打つ決意を実行するに足る「勇気」を得ようとして、酒場から酒場へとさすらって行く。「論文」を彼に渡した人物に似ている男の忠告によって、彼はバー「黒鷲」に入ろうと決心する。彼がコール・ガールのヘルミーネに会うのはここである。彼女は彼が酔っぱらっているのを見て、そのバーで眠って酔をさますように忠告する。計画した自殺をそれだけ遅らせることになる口実を喜んで、彼は同意する。

初めてテレジーナを見たとき、このタイプの女に反発する感情が起るほど、まだ以前の生活に制約されていたフリードリヒ・クラインとは違って、ハリー・ハラはヘルミーネのうちに自らの救済を見る。「私は彼女のことばかり考え、彼女からすべてを期待した。彼女には少しも惚れ込んではいないのに、すべてを彼女に捧げ彼女の足もとに置く覚悟ができていた。」139 彼女は彼の心を以前の状態に引き戻した。なぜなら、「以前から何も待ったことがなく、何も期待したことなかったしらけた男にとって、それは思いもよらぬほど美しく新しいことであった……このまま1日不安と心配と激しい期待にみちてあちこち走り回り、その晩の出会い、会話、結末をあらかじめ考えつくすということは、すばらしいことであった。……」140

ヘルミーネは複雑な側面を持つハリーの性格を、幾分たりとも認識し理解しようと決心する。彼女は彼が「ワン・ステップ」さえ踊ることができないのにぞっとする。彼の体験の他の面に存在する不均衡を和らげるために、ヘルミーネは彼を自分の世界に案内する。セオドア・ジィオルコースキーは、ヘルミー

ネを一つのテストケースとして解釈している。

「……より高いレベルにおいてハラーが、彼女とその世界……ダンスとジャズ、パブロとマリーアの愛の乱痴気騒ぎ、麻薬や生活の素朴な楽しみ……を受け入れたことは、狭い市民社会全体の拒否と、不滅の人々の王国を目指す志願者としての彼の新しい次元とを象徴するものである。」¹⁴¹

ヘルミーネはハリーの救いになる。彼女は不幸な結果になったかも知れない彼自身の錯誤による計画から彼を救い、生きている人々の世界へ彼を連れ戻す。彼女は彼にとって「私の暗い不安の洞穴の中の小窓、小さな明るい穴」の象徴である。「彼女は救いであり戸外への道であった。彼女は生きることか、死ぬことか、どちらかを教えねばならなかった。その固く締った愛らしい手で、私の硬直した心臓にさわらねばならなかった。それが生命に触れられて花開くか灰に帰するかするために。」¹⁴²

ハリーが必要とするものを口に出す前に気づくので、ヘルミーネは彼がマリーアとダンスをするように取りはからう。ヘルミーネは、思想家ハリーは100才であることを認める。「しかし踊り手としては生れてやっと半日です。それを私たちがこれから教育するのです。同じように小さく馬鹿で未熟な小さな兄弟たちもみな。」¹⁴³ ダンスのフロアでの体験は、これから彼が体験することになる多くの興奮の前兆にすぎない。なぜならそれからすぐ彼が家に帰ると、マリーアが彼のベッドにいるのを見つけるからである。

「マリーアは私に多くのことを教えた……あの不思議な最初の夜とそのあとの数日のうちに……官能の愛らしい戯れや歓喜ばかりではなく、新しい理解、新しい見識、新しい愛も教えてくれた。ダンスホールや娯楽場の世界、映画、バー、ホテルの喫茶ホールの世界は、世捨て人であり唯美主義者である私にとって、依然として価値の低いもの、禁じられたもの、品位を落とすものを持ってはいたが、マリーア、ヘルミーネ、その仲間たちにとっては世界そのものであった。善くも悪くもなく、望ましいものでも悩むべきものでもなかった。この世界に彼女たちの短かい憧れの生活が花開き、この世界に彼女たちは精通しなれ親しんだ。」¹⁴⁴

注目に値することは「生れて初めてハリー／クラインが罪悪感のない性体験を持つということである。マリーアと共に彼は、彼のインド人の先輩たちのような暖かい庭、快樂の庭にいる。」¹⁴⁵ この状況は性的抑圧に関してクラインに加えられた暴露を考慮すると特に問題になる。マリーアとヘルミーネを通じてハリーは、「ほんのつかの間の喜びを探し求め、性の無邪気さの中で子供になり

動物になることを学ぶ。……なぜなら、官能の生活と性は私には殆んどいつも罪の苦い副味を、禁じられた果実の甘美ではあるが不安な味を持っていたからである。この果実には精神的な人間は用心しなければならないのである。]146 しかし今やハリーは前進しなければならぬと感じる。「今ヘルミーネとマリーアは、この庭を無邪気な姿で私に見せてくれた。感謝して私はこの庭の客になっていた……だが間もなく私にとって先に進むべき時になった。この庭の中は余りに美しく暖かすぎた。]147

ハリーとヘルミーネが議論したさまざまな思想や態度は、彼自身の神話に由来するものである。なぜなら、この思想と態度はハリーの最も内奥の自我に起因していたからである。148 ヘルミーネとマリーアは、彼らに先行するテレジーナやカマラと同じように、意識の領域における解明と承認とを強く迫るアニマの原型、無意識からの力を体現している。彼らは無意識の投影として考えられている……『シッダールタ』は多分例外であろうが、この作品では以前の他のどの例よりもうまく処理されている。ハリーがヘルミーネとマリーア双方の生活と役割を肯定するのは、ヘッセが彼自身の最も内奥の欲求と衝動を受け入れたことに等しい。ハラー／ヘッセは自己破壊への傾向を明らかに克服した。彼が統合したものは、彼が決して同化できなかった以前の生活の側面なのである。しかしながら、究極のテストはハリーが新しいハリー・ハラーのさまざまな面を、「魔術劇場」で追求するように招待されるときである。

サクソフォン吹きのパブロは、ハリー・ハラーの内面世界の一部であるヘルミーネやマリーアと同類である。楽々とはないが、ハリーは結局パブロを以前よりも良く理解し始める。二人は仲の良い友人になる。極めて暗示的にテレジーナとダンスをした、縮れた黒い髪の若者として、我々は以前パブロに出会った。クラインはテレジーナの黒い顔色のダンスのパートナーを受け入れる気には決してなれなかったし、自分のアニマであるテレジーナを同化することもできなかった。クラインは自殺しようとする衝動に屈服したが、ハリー・ハラーはそうした傾向を乗り越える。彼が新しい生活の幾つかの側面を受け入れるとき、彼の以前の両極性の多くは片付けられる。

「魔術劇場」の意味は、彼を締め殺そうとした女たちについてのクラインの夢と多少関連を持つものとして描かれた。「魔術劇場」の入口は、自我、無意識への入口である。劇場には無数の出入口がある、そのひとつひとつがハラーの心の構造のさまざまな面を隠している。司会者パブロは、ハリーに自分の人格を入口に置いて、劇場の回りを左に進むように、そしたら反対の方向に回るこ

とになっているヘルミーネとまんなかで会おうだろうと指示する。

「あなたがそのまま劇場に入ると、ハリーの眼で、荒野の狼の古い眼ですべてを見ることになるでしょう……ハリー、あなたは後生大事な人格を脱ぎ捨ててから劇場の左側を自由に見て回りなさい。ヘルミーネは右側を、好きなときに中でまた会えます。」149

勿論、入口に人格を脱ぎ捨てることは、個性化の最後の段階を通じて最高に重要なことである。もし人が自分の心の構造のあらゆる面を認識し、受け入れねばならない場合には、以前の先入観によって絶対に妨げられることも、片寄ることもない個人が、無意識のこれらの側面に直面するということが不可欠である。ハリーにとってはこれが最後のテスト……無意識のあらゆる面を統合しようと試みるテストなのである。

2人の人間の進行の方向に関しては……ヘルミーネが右へ、ハリーが左へ……心理学的観点からすれば、各々の方向に意味があるということが指摘されねばならない。ユングは、「左は無意識の側を意味する。運動の左回りは従って無意識の方向への運動に等しいことを意味する。一方右回りは「正しい」ことであり、意識の方を目標にしている」150 と述べている。このようにハリーは無意識をより一層深く探求しようとし、ヘルミーネは意識に向かって進んで行こうとしている。

「円運動はそれ故人間の本性のあらゆる明るい力と暗い力に、従ってどのような種類のものであろうとあらゆる心理的な対立に、活気を与えるという道徳的な意味も持っている。このことは自己抱卵による自己認識を意味する。完全な存在についての同様な原観念は、全面的に円い、プラトンのな人間でもある。その人間においてはあらゆる対立が、性の対立さえもが一致しているのである。」151

劇場の中央に着いたとき、ハリーはヘルミーネとパブロとが愛し合っているのを見つける。ハリーは内面の対立を和解させる点では、これまで非常にうまくやってきたのであるが、この2人の裸の恋人の光景は、彼には対処できないように思われる。彼はす早くナイフをつかんで、ヘルミーネに突き刺す。それによって彼らが知り合った初めの頃に彼女の言った予言を実現する。152 ハリー・ハラーは最後の試験に失敗した。事態が一直線にこうした結末になったとき、彼は明らかに以前の体験や傾向から完全に絶縁することができなかった。従って不滅の人々に加入する飛躍を果たすことができなかったのである。エマヌエル・マイアーが、「ヘルミーネを殺すことによってアニマの投影を同化した

あとで、ハリー・ハラーは生き続けるように運命づけられている」153……と劇場での最後の対決の結末を考察しているのに反して、筆者は実際には、この時点において知識人ハリー・ハラーの見解と態度への後退があったのであり、また彼は首尾よくアニメ像を同化し得なかったのであると感じている。ボールビーもまたこれと同じ意見である。

「ハリーによるヘルミーネの殺害は、彼が失敗したことの証拠である。彼はマーヤー（即ち魔法）の幻影に屈服する。それは幻影の中の幻影である。劇場そのものがアヘンの夢なのだから。論文が述べているように、彼は理論上は売春に反対してはいないけれども、娼婦をまじめに考えたり、実際に自分と同じ人間と見なすことはできなかった。(IV. 236)彼はマリーアの中に、無邪気で官能的な人間である女のタイプを発見する。そうした女は自分の知的な先輩たちが、彼の人生において決してできなかったやり方で彼を充実させる。しかしそれでもやはり彼は自由ではないし、ブルジョワ的良心によって抑圧されたままである。彼のヘルミーネ殺害は、単にありふれた嫉妬によって動機づけられているのではなく、(長い目で見ればパブロが空しく期待しているように)むしろブルジョワ的な自我への不幸な逆もどりであり、官能的なものに対する嫌悪の高まりである。」154

こうして『荒野の狼』は、著者が彼自身の自己治療による個性化を、かなり進んだ段階にまで達成させたことを明らかにしている。ハリーは最終の目標には到達しなかったけれども、完全に失敗したのではなかった。彼は今度はナルチスやゴルトムントという人物に変装して、もう一度機会を持つことになる。両極性の成功した統一はヘッセの小説の他のどれよりもより一層完全に『ナルチスとゴルトムント』において達成されている。

註

127 Max Schmid : H. Hesse, Weg und Wandlung. Zürich. 1947. P. 27

128 H. Hesse : Gesammelte Dichtungen, Vol. III. Siddhartha, P. 692

129 Ziolkowski, P.168

130 Hesse : Siddhartha, P.652

131 Boulby, P. 141

132 Ibid. P. 143

133 Ibid. P. 145

134 Hesse : Siddhartha, P. 673

- 135 Ibid. P. 690
136 Hesse : Der Steppenwolf. München. Deutscher Taschenbuch Verlag. 1963, P. 24
137 Hesse : Ges. Dichtungen, Vol. II, Der Kurgast, P. 76
138 Hesse : Der Steppenwolf, P. 56
139 Ibid. P. 87
140 Ibid. P.88
141 Ziolkowski, P. 210
142 Hesse : Der Steppenwolf, P. 88
143 Ibid. P. 106
144 Ibid : P. 116
145 Boulby, P. 190
146 Hesse : Der Steppenwolf, P. 131
147 Ibid. P. 132
148 Maier, P. 149
149 Hesse : Der Steppenwolf, P.147
150 Maier, P. 153
151 Ibid. PP. 153-154
152 Hesse : Der Steppenwolf, P. 93
153 Maier, P. 154
154 Boulby, P. 200

本稿は、V. J. Bennett : The Role Of The Female In The Works Of Hermann Hesse, 1972
の中の〈Siddhartha〉及び〈Der Steppenwolf〉の訳である。本文の英語を内尾一美君が訳
し、引用の独語を渡辺信生が訳した。訳文について、同僚の英語科教授即席水雄先生に、貴重
な御意見や御指摘をいただいた。心からお礼を申しあげる次第である。